

## 英彦山修験道における植物崇敬と文化継承

知足, 美加子  
九州大学芸術工学研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/7420022>

---

出版情報 : 社叢学研究. (24), pp.67-72, 2026. 社叢学会  
バージョン :  
権利関係 :



# 令和7年度社叢学会「太宰府大会」シンポジウム「英彦山の山岳信仰と社叢」基調講演1 「英彦山修験道における植物崇敬と文化継承」

ともたり  
知足美加子（九州大学芸術工学研究院教授）

## 【講師略歴】

九州大学芸術工学研究院教授、  
博士（芸術学）、国画会彫刻部会員。  
日本山岳修験学会評議員。  
筑波大学大学院芸術学研究科彫塑  
コース修了。海外青年協力隊コスタ  
リカ共和国派遣（美術）。  
英彦山山伏「知足院」の子孫。自然  
とアートをテーマに復興支援活動等  
を行う。

## はじめに

皆さんはじめまして。九州大学の知足ともたりです。今日はよろしくお願ひします。私の専門は芸術学、彫刻です。私の先祖は英彦山の知足院ひこさんちそくいんという山伏です。この名の由来は、「足を知る」という仏教の言葉です。しかし、明治期の廃仏毀釈の際に還俗を強いられ「知足」という名になりました。私は、自分の背負ったルーツと自分にできる芸術というものを組み合わせて、研究や制作をしているところです。本日は「英彦山修験道における植物崇敬と文化継承」についてお話をしたいと思ひます。

古くから英彦山修験道は自然を神仏として崇敬してまいりました。英彦山には鬼杉・千本杉・行者杉などの神仏が宿る「霊木」が存在します。霊木群は、英彦山修験道の自然信仰とどう関係するのでしょうか。本日は、山全体を植物崇敬のネットワークとして捉える「霊山」独特の自然護持についてお話をさせていただきます。私の後に九州大学農学部の渡辺敦史先生が詳しくお話されると思ひますが、九州のスギは氷河期にほぼ全滅したと言われてきました。ところがゲノム解析の結果、英彦山の鬼杉とその周辺のスギ群は氷河期以前の在来種の遺伝子をもつことが分かったのです。

## 自然と人間を対立させない文化観

これより、「霊木の命の継承」への希求が、英彦山の修験道文化に深く関わっていることについてお話しします。「木の血脈」ともいえる考え方です。「植物の生命力への崇敬」について、まず日本の芸術と自然の関係からお話しします。古代ギリシャにおいて、「Art (τέχνη)」は人間による技術を表し、Nature (自然) の反対語にあたるものでした。AI (人工知能) の「A」は、Artificial (人工的な) という意味です。Liberal Arts は、人間の思索の技術を磨くものです。西欧では、人間によるものを Art とよんできました。それでは、日本はどうだったのでしょうか。もちろん日本にも美しい手業がたくさんありましたが、それは決して自然と対比するような形ではなかったのです。それは、日本の色彩名にも表れています。トキ色・朱色・若葉色・ヨモギ色など、日本の色味は自然物そのものを映し出しています。西洋の色は、シアン、イエロー、マゼンダといった系統表記が多いです。ネズミ色をマウスカラーとはいいませんよね。日本には、自然と人間を対立させない文化観が存在します。

## 仏像の形を作り神仏を拝む

これは、木彫の世界にも言えることです。中国の仏像というのは青銅の鑄造物が多いのですが、日本に入ると木彫の仏像が多くなります。これは、木の中に「神仏習合」を見出すという日本の自然観によるものです。神霊が現出する木を、聖なる「神籬ひもろぎ」として神道的な崇敬対象と考えます。また、木は発芽して枯れますよね。そこに「発心・修行・菩提・涅槃」にいたる仏教の修行の過程を見出すわけです。神道のシンボルである霊木で、仏像の形を作り神仏を拝む、そう見立てるといった感覚がございます。例えば木彫の仏像には「鉦彫り」という技法があります。ツルツルに仕上げずに、わざと鑿跡のみを残すのです。鑿跡は、鑿音の響きや香りによって霊気が現出する時間的な経緯の表現、つまり「功德の視覚化」なのです。

日本で最初にできた仏像は、海から流れ着いた香り高い白檀で作られたといわれています。木の香りの現出が大切なのです。白檀がない日本において、飛鳥仏くすに樟が使われた理由も香りでしょう。樟の香りにはカンファー（樟腦）というカンフル剤の成分が入っています。滋賀県甲賀市あつぎにある櫛野寺の「立木仏」は最澄



知足美加子 九州大学教授

(766-822)が立木のまま彫ったと言われています。円空(1632-1695)は樹木の中から荒々しい削り跡とともに浮かび上がる姿こそ神仏の姿と考えました。木の素材感や鑿跡に宗教的意味を見出す、そういう思考を日本人はもっています。

#### 常緑樹の生命力に人々は感動する

これは高千穂神楽です。高千穂神楽三十三番において式三番として欠かせない神楽が「杉登」です。「杉」は天と地をつなぐ表徴です。イメージを想起させるようなしるしを「表徴」といいます。神様は杉を伝わって降臨します。この表徴は、高い杉に雷(神の降臨)が落ちやすいことにも関係します。また、杉の尖った葉は霧などから水分を吸収することができ、天からの降臨をイメージさせます。「杉登」の最後に、神は椎木(乗り柴)と呼ばれる広葉樹を通じて天に帰ります。神道では、常緑の木を通じて神様が移動するという感覚があります。祝詞には、冬でも枯れない橘の生命力に対する感動がこめられています。クリスマスの樅の木も常緑です。常緑樹の生命力に人々は感動するのです。杉・檜・樟など常緑で役に立つ木は、日本書紀の中でも大切に扱われています。



鬼杉(国指定天然記念物)

英彦山南岳の「鬼杉」は大正時代に樹齢1,200年として国指定天然記念物に指定されました。なので、今は樹齢1,300年だと言いましょ。落雷を受けた「鬼杉」は、神が大地に降りるために選ばれた「霹靂の木」といえます。日本書紀において「霹靂(落雷)の木は天地感応の結果で、落雷木は選ばれた依代」とされています。

#### 昭和初期は杉の大径木と落葉樹の針広混交林

「千本杉」は英彦山八合目から産霊神社(行者堂)に続く道沿いにあります。産霊神社は、飛鳥時代に高皇産霊尊(別名高木神)が鎮座した旧地です。高木神は巨木を意味し、雷神である建御雷神を使役するという説があります。産霊神社は740年に聖武天皇の頼願によって建立されました。藤原広嗣の乱(740)と同年なので、この頃に天皇と英彦山は何らかの繋がりがあったと考えられます。この写真は昭和初期の頃の千本杉ですが、杉の大径木と落葉樹の針広混交林であったことがわかります。下層にはシロモジとかクロモジとかカエデとかシキミとかの落葉広葉樹がありました。千本杉は修験者によって参道の両脇に植林された樹齢300~450年の寒冷地で成長するホンスギです。スギは九州地方の在来品種だけでも約30種あります。日本海側に分布するスギ(裏杉)は、雪で倒れても生きようとして枝からでも根をつけます。つまり、挿し木の能力が高いのです。ホンスギは硬く、すぐに大きくならないので、おそらく昔は船の帆柱に使われていたと考えられます。その逸話(豊前坊と小早川隆景)については後でお話します。英彦山のホンスギが氷期以前の在来種の子孫である可能性については、後ほど渡辺先生がお話をしてくれます。

#### 英彦山のスギ板の鉾条は「吉祥の徴」

かつて、徐福(伝・紀元前200年頃)が英彦山千本杉に長生不死の薬を埋めて、その印に著(ノコギリソウ)を植えたといわれています。それを服した行者が仙人になったという話が『彦山見聞録』(1717年)にあります。おそらく相当昔からここに自生の杉林があったと推測されます。「英彦山の杉が石のように硬い」という材木石の逸話があります。材木石は火山由来の柱状節理で、材木を重ねたような形をしています。昔、鬼が日の出前に建築中の材木を置いて逃げたものだとわれています。鬼が逃げる際に挿した木が「鬼杉」となったという伝承もごさいます。英彦山のスギ板の鉾条を「帆掛け船」とよぶことも、船との関連を感じさせます。以前、英彦山神宮の高千穂秀敏宮司にこの鉾条を見せていただいたことがあります。寒い地域にあるスギに出てくる黒い模様で「吉祥の徴」なのだそうです。



英彦山千本杉(昭和初期絵葉書)

#### 修験道美術における「植物」

英彦山修験道美術における「植物」の話をしたと思います。英彦山の開山伝承のひとつ、善正上人に関するものです(531年)。中国北魏の孝武帝の子・善正は日本に逃げのびます。山は外国人が川筋を遡ってたどり着く場所で、文化の坩堝となり混雑文化が生まれやすい所です。善正上人は太宰府で仏法を広めようとしてしまいましたが、樹木でおおわれた日子山(819年までの呼称)に光をみて



玉屋窟で修業を始めます。そこに藤原恒雄<sup>こうゆう</sup>という狩人が来て、善正から殺生をいさめられますが言葉がわかりません。その時あらわれた白い鹿を恒雄が弓矢で射ると、3つの岳の頂きの大檜<sup>ひのき</sup>から3羽の鷹が飛んできました。1羽が矢を抜き、次の1羽が翼で血を拭き、最後の1羽が檜の葉に浸した水を与えると白鹿は元気に蘇生しました。恒雄は殺生を恥じて狩人を辞め、忍辱上人<sup>にんにく</sup>になりました。この《善正上人・藤原恒雄像》を観察すると、クマザサやアカマツ、この辺りにスギかヒノキが見受けられます。江戸時代に描かれた《彦山垂迹曼荼羅》の中にも3羽の鷹や大檜が描かれています。その後、法蓮上人が同じ玉屋窟で修行をすると水が湧いたという伝説を描いたのが《法蓮上人像》です。これは、俱利伽羅竜<sup>くりから</sup>が法蓮に珠を授ける場面です。今でもそこから水が湧いています。

**北辰信仰に太陽信仰を重ねた英彦山信仰**

上の方に北斗七星が描かれているのは北辰信仰(北極星の信仰)によるものです。海を渡る人や中国のように広大な大地を移動する人にとっては、北極星は指針になります。北極星(北の方角)を信仰することは中国の影響を受けていることの証です。北辰信仰に太陽信仰を重ねたダブルイメージをもつことは、英彦山信仰の特徴です。明治期の廃仏毀釈の際に、沢山の美術品が山外に流出しました。先日、その中のひとつが英彦山に戻ってきました。北斗七星信仰は妙見信仰ともいい、この《七観音像》は妙見菩薩(如意輪観音)など七尊の観音様で構成されています。英彦山修験の十界修行は、6つの地獄(地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天界)を体験します。観音様たちは、これらの地獄から救ってくださるのです。「玉屋窟」には7つの岩があり、如意輪観音の垂迹地といわれています。



小石原・行者堂(上) 役小角像(下)

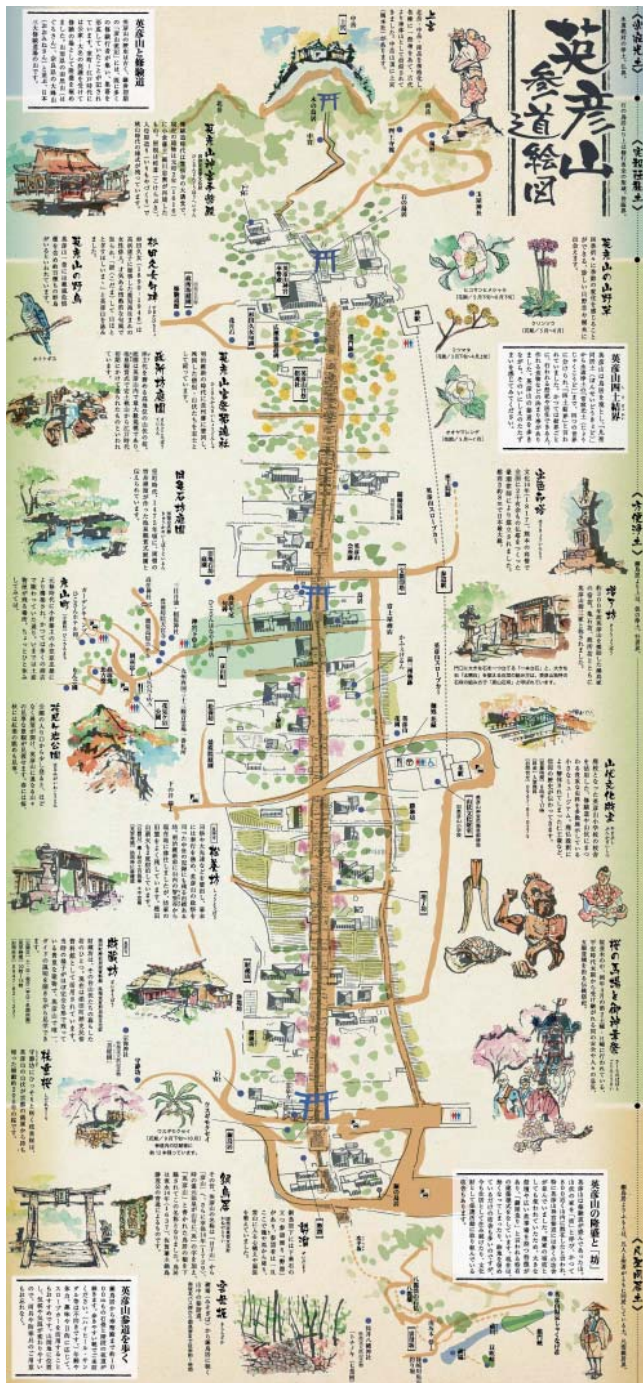
**《仁王経曼荼羅》「水に関する意匠」が多い**

それでは、《仁王経曼荼羅》における植物の説明をしたいと思います。これは、不動明王を中心に五大明王と八童子、十二天を東西南北に配置した「曼荼羅」です。仁王経曼荼羅の多くは、北(息災法)か東(増益法)が上位に配置されます。南(調伏法)や西(敬愛法)が上にくることは殆どありません。しかし、英彦山の仁王経曼荼羅は本当に珍しいことに、西方が上位になっています。これは「敬愛」を表現する曼荼羅で、最も上位にある十二天は「水天」です。八大童子の中では、阿耨達童子<sup>あのくた</sup>という「池水の無垢な使者」が上位におり、龍王に乗っています。水天は水を操るマカラという霊獣に乗っています。どちらも「水に関する意匠」

が多いことから、英彦山が水を大事にする「水分<sup>みくまり</sup>」の山であることがわかります。水を配るような御山というのは、誰かが占有すると困るのです。なので、英彦山では水は神様のものとして、里の人々で分かち合ってきました。英彦山は平安期より荘園でした。地域通貨があるなど、「守護不入の地」として独立性を保ってきたのです。《仁王経曼荼羅》について、もうひとつ不思議な点は、8尊の仏座が「木の丸太」であることです。仏座には、蓮華の形(蓮華座)、動物の形(鳥獣座)などがありますが、丸太を輪切りにしたような仏座は、いろいろ調べてもでてきません。中でも「地天」は上位におかれ、十二天の中で唯一木の仏座に座し、植物等の生命を育むことが強調されています。同じく上位にある「月天」は不老不死の霊薬ソーマの盃をもつそうです。私の結論は、この《仁王経曼荼羅》は、水と木への信仰を表すものであり、植物等の命を滋養する自然界への敬愛と、五穀豊穰を願う平和で素敵な曼荼羅だということです。英彦山のご祭神「天忍穗耳命<sup>アメノオシホミミノミコト</sup>」は、農業を教えた神といわれています。東征を命じられても「行きません」と言って、結局天孫の瓊瓊杵尊<sup>ニニギノミコト</sup>が降臨します。平和を愛するご祭神なのです。



東  
《仁王経曼荼羅》江戸時代



英彦山参道絵図  
(英彦山門前町同好会)

神様が通る道には杉が植えられ、結界では水を汚さない《英彦山図》(1785-1822年)から江戸時代の植生を紐解いていきたいと思います。樹木による神仏の荘厳ということですね。図にはブナの原生林や、千本杉、鬼杉、アカマツがあります。中心に参道がありまして、私の実家も参道のこの辺りにあります。神様が通る道はだいたい両側に杉が植えられています。英彦山には、標高にそって4つの「四土結界」が設けられました。下から「凡聖同居土」「方便浄土」「実報莊嚴土」「常寂光土」といい、1つひとつに「ここで血を流してはいけません」「ここには人の住む家を建ててはいけません」といった禁忌があります。結果的に、防災にも役立っていると思います。頂上の「常寂光土」は、15回の峰入り(約8年間)を修めた人でないと入れませんでした。今は皆が上がりますけれども、この結界では水を汚してはいけません。もちろんトイレはダメですし、涙を流しちゃいけない、汗もかいてはいけません。昔は父はこの辺で一回シャツを脱いで、新しいシャツに着替えて登っていました。滅多やたらと上がってはいけない場所だったそうで、私も小さい頃はあまり上がったことはありません。ブナの原生林があります。「実報莊嚴土」は山伏たちの修行の場で、千本杉やシロモジなど針広混交林です。「方便浄土」というのは仮の浄土として山伏が住む場所です。こちら辺は梅・桜・楓で莊嚴され、各坊(山伏の住居)が違う種類の竹を植えていたそうです。「凡聖同居土」は山伏以外の人も住むことができましたが、五穀栽培が禁止されていました。土を動かさないでくださいねという場です。

**英彦山の木は神のもの「山外不出」の掟**

これは英彦山の板倉です。筑波大名譽教授の安藤邦広先生が、この板倉の木組みを見て感心されていました。これは桃山時代の座主の板倉です。組み方が互いに斜めになって、難しい仕組みになっています。雨が降ると、斜めのラインに沿って水が流れるようになっています。さらに安藤先生が驚かれたのは杉板の厚みです。これくらい厚い板は、ヨーロッパのアルプスでしか見たことが無いと言われていました。昔から英彦山の木は神のもの

として「山外不出」という掟がありました。江戸時代には法律化しましたが、山内では使えました。古くからとても豊かな森林資源があったのです。

**シャクナゲの葉は胎蔵界と金剛界が表裏一体**

植物の宗教的表徴の話をしします。英彦山にはシャクナゲが沢山あります。明日の見学会に行かれたら気づかれると思います。何故シャクナゲなのかというと、シャクナゲの葉の裏は金色なのです。「胎金一如」といって、胎蔵界(葉表)と金剛界(葉裏)が表裏一体となっている尊い表徴なのです。シャクナゲは木陰に植えないと花が咲きません。茶も大切な植物です。山伏たちは各坊で茶を生産していました。私の実家も、祖母の代までは茶づくりをしていました。なぜ山伏は茶を作ったかという、薬草によって医療的な仕事も行ってたからです。茶は靈気と水による山の化身であり、不老長寿の靈薬として祈祷の際などに配布しました。この写真は以前あったシャクナゲ荘の近くに自生している茶樹です。鹿に食べられていないかぎり、今も坊跡に残っています。茶は平地だと葉が厚くならずダメらしいですね。一日の寒暖差が激しい所では、茶は自分を守るために葉を太

らせて旨くなります。このほか、ミツマタは「護符の紙」を作るために栽培されました。杉葉は「線香」になります。「柿渋(染料)」のために柿も植えられていました。十界修行で地獄を経た山伏は、赤ちゃんとなって山から新しい生命を得ます。柿渋で染めた赤い「柿の衣」は、オギャーと生まれ直した擬死再生のしるしです。八裴はへその緒を、斑蓋は胎盤を表します。また、坊ごとに違う品種の竹を栽培していました。私も毎年篠竹の花筒を60本作り、先祖の墓に供花をしております。



玉泉坊墓碑(1827)

### 樹木の伐採は「悪逆無道の挙動」

次に、味酒顧問の特別講演にありました「小早川隆景が秀吉に朝鮮出兵を命じられた件」に関する霊木信仰について紹介します。1589年、小早川隆景が巨大な船を作るため英彦山の大きな杉を帆柱のために伐採したところ、英彦山の3つの岳から火の輪が飛んできて隆景を戒めたと『彦山権現靈驗記』(1709年)に記されています。隆景は人格者で名高い武将であり、英彦山の杉の伐採を恥じて土地を返上したといわれています。月岡芳年(1839-1892)が描いた《小早川隆景彦山ノ天狗問答之図》には、杉林の間に隆景や船が描かれています。『陰徳太平記』(1717年)にも英彦山の豊前坊という天狗と隆景の会話が登場します。豊前坊は、「英彦山の樹木は葉や枝、幹にいたるまで折るなかれ、抜くなかれといわれてきた。これは神仏を崇敬するがゆえである。それなのに何の恐れる心もなく樹木を伐採し舟具に用いるとは、なんと奇怪なことか」「悪逆無道の挙動」と言うのです。英彦山がどれだけ木を大事にしていたかがこの話からわかります。

### 故人が植えた杉の本数がお墓に記してある

組織的・法的整備による森林再生は、戦国時代(1581年)の太田義統による英彦山焼き討ちが契機となりました。これを機に神社仏閣をつくる「作事奉行」、森林環境を整備する「山奉行」が設立されました。1597年に黒田長政が社殿の再建を行っています。山奉行は、勝手に木を伐採した者には科料を科しています。また、「惣物銀」というクラウドファンディングのような共有基金をつくり、社堂修復や緊急事に備えました。火を放った太田義統は英彦山では今でも人気がありますが、彼のおかげで仕組みが強化されたこととなります。植樹が奨励されていたことがわかるのが、山伏の墓碑銘です。「杉二万五千本指立」「杉一万本指立」「杉五万本指立」と故人が植えた杉の本数がお墓に記してあります。全山の木がほぼ焼失したので、必死に山伏が植えたのだと思います。徳川家康の裁許で、山中の竹木は外に持ち出してはならないという法律「九州彦山條々」が1600年に制定されました。1642年には「爪楊枝程の大きさの木であっても持ち帰ると罰しますよ」という「十三ヶ条法度」が出されています。相有という座主は、1698年に美観として木を植え景観を整えました。聖護院と彦山の「本末訴訟」(1996年)にお金が足りないので境内の巨杉を売ろうとしたとき、山伏の泉蔵坊が私財を投じてこれを守りました(泉蔵坊杉)。大戦中、軍用のために玉屋窟の杉が切られそうになりました。その時「我とともに切れ」と言って動かず、伐材を断念させた官番の方もおられます。

### 修験道を文字に残すと目が潰れる

最後に、英彦山修験道と命の再生・継承の尊重についてお話しします。修験には「擬死再生」という考え方があります。「山(森)」は、死を体験し、命を再生するという両義性をもつ場なのです。修験道は知識を学ぶことより、言葉にならないものを体得する実践(行)を重視します。行動ありきの「体験のデザイン」なのです。私の先祖が伝統を失ったのは、文字に残すと目が潰れると言われ、口伝の伝承しか許されなかったからです。明治期の廃仏毀釈の際、一代が伝統を継承しないと何も分からなくなってしまうました。それでも、残された自然を通じて、おそらくこういうことを感じていたのではないかと想像します。彼らの思いや文化や苦勞が自然の中に残っていると、大人になって考えるようになりました。阿吸坊即伝という修験者が禁忌を破って書き残した『修験道修要秘決』(1558年)があり、全国的に修験道の基礎資料になっています。この中に「人畜草木森羅万象 全シ 六



鬼杉不動像(知足, 2022)

大法身依正本有ノ佛ト覚知スベシ」と記されています。「全てのものは真理そのものであり平等に仏性が宿る」という意味になります。

#### 台風で落ちた鬼杉の枝を用いた不動明王の制作

ドローン撮影の許可をいただいて、英彦山南岳の鬼杉を空撮しました。本来は60メートルあったのが雷で折れて、今は38メートルになっています。英彦山神宮の約20mの杉画像を仮につなげてみると、こんなに高い杉だったことがわかります。余裕のある方は、いつか鬼杉に会いに行ってください。

私はどこかで先祖の「無念の思い」を背負っています。高千穂秀敏宮司の<sup>ほつがん</sup>発願を受け、台風で落ちた直径90cm程の鬼杉の枝を用いて、修験者の守り神の不動明王を制作することになりました。「尊いご神木の枝だから」と、雪の日に地域の方々が運び保管されていたものです。大南神社の不動明王坐像を参考にしました。光背は千本杉の倒木で作りました。お顔は高千穂有昭さん（権禰宜）をモデルにして作らせていただきました。不動明王の眼は「天地和眼」といいます。片眼が上、片眼が下を向いていて、天と地を繋ぐのです。<sup>はしらもと</sup>「柱源供養」という修験者の大事な修行があります。私は、スギが柱源の象徴なのではないかと考えています。天と地をつなぐ命の再生の象徴です。不動明王の制作が進むにつれ、次第に杵目が「天地和眼」のようになり、自分で彫っていて感動しました。《鬼杉不動》として下津宮に奉納しています。さらに、今年の4月、2本あった鬼杉の枝の一方を横2つに割り、有吉さんのお子様のお顔をモデルにして不動明王の脇侍（<sup>こんがらどうじ</sup>矜羯羅童子と<sup>せいたかどうじ</sup>制多迦童子）を彫り、奉納しました。千本杉倒木の台座には、柿渋を塗っております。鬼杉不動三尊像の横で、有吉さんは毎日水垢離をされておられます。



小石原・行者杉

#### 木の物語を活かし、森をデザイン

現在、朝倉三連水車を未来につなぐ森づくりのプロジェクトを行っています。朝倉三連水車は、木材価格の高騰（ウッドショック）等により存続の危機に陥っていました。それなら水車の木材の素材を育成する森をつくろうということで、渡辺先生にもご協力いただいて一生懸命動いております。地域の実生苗や球果、挿し木を使って遺伝子攪乱が起こらないように留意しています。小石原川ダムというのは昔の英彦山七里四方の中に位置しています。ここで英彦山由来のアカツを育てようと思っております。

これからは、スギを間伐し「使う」ことで森を保全し、巨木杉と広葉樹の針広混交林をつくるのが重要です。彫刻でいう「カービング」と、現存する種を尊重した植樹を行う「モデリング」をすることによって森を豊かにするのです。「木の物語を活かし、森をデザインし、注意深く増やす」ことが重要です。社叢は、歴史文化を保全し未来に伝える「生きる文化財（リビングヘリテージ）」です。大事にしていきたいです。